NIDS 防衛研究所 National Institute for Defense Studies
Tokyo Japan
NIDSコメンタリー
第 297 号　2024 年 2 月 2 日

インド太平洋における米軍の軍事態勢と課題①

――米海兵隊の作戦コンセプトと日本および周辺における近年の演習を中心に

政策研究部長　菊地　茂雄

はじめに

2022 年、米インド太平洋軍が議会に提出した報告書「主導権の確保（Seize the Initiative）」は、「最も重要な戦域」であるインド太平洋において、米軍部隊の活動は「係争環境における全ドメイン統連合作戦を持続的にリハーサル、展示するための一連の作戦、活動、および投資と連携、同期しなければならない」との方針を示した[1]。また、2023 年 4 月 18 日の下院軍事委員会公聴会において、同軍司令官のジョン・アクイリノ海軍大将も、「主動の確保」の方針に基づき「強力な戦域態勢」、「戦闘力がある、持続的な前方戦力によるキャンペーン」を目指すと説明している[2]。そして、実際にも、米軍は、敵対国による攻撃を受ける範囲において作戦を行うことを想定した演習を、日本を含む第 1 列島線上において活発化している。本稿では、そのもっとも顕著な例として米海兵隊を取り上げ、実際の演習や部隊の展開を、国家防衛戦略（NDS）上の方針や海兵隊の作戦コンセプトとの関係を踏まえて分析するものである。

1　敵脅威圏内部における作戦と「キャンペーン実施（campaigning）」

敵対国が攻撃し得る範囲において作戦を行うというのは、2018 年 1 月に要約が公表された NDS（以下、2018NDS）上の要請でもあった（NDS 全文は非公開）。国防次官補代理（戦略・戦力開発担当）として 2018NDS の取りまとめを行ったエルブリッジ・コルビーは、同職を退任後の 2019 年 1 月 29 日に開かれた上院軍事委員会公聴会で、2018NDS に込められた狙いについて説明した。そこで彼は、2018NDS が、中国が台湾に対して、ロシアがバルト 3 国やポーランドに対し、米国等による対応を遅滞させつつ圧倒的な軍事力により迅速に占領、これらの領土に軍事力を展開して現状復旧を著しく困難とする、いわゆる既成事実化戦略に対応することを主眼として作成されたことを明らかにした[3]。そして、

中露の既成事実化戦略に対応するためには、彼らの「勝利の方程式を打ち破る」ことが必要であり、そのために、戦い方について「これまでとは異なるアプローチ」をとることが必要であったと説明した。そこで、コルビーが強調したのが「米軍部隊が敵対行為の最初から中露の攻撃に抵抗」し「全ドメイン優越といったものを獲得することなしに、最初は北京あるいはモスクワによる侵略を遅滞し、次いでその侵略を撃退するべく、永続的に係争的な作戦環境において戦う」ことであった[4]。これは、中露の既成事実化戦略を拒否するためには、「敵対行為の最初から」米軍は中露が侵略を行う場所に留まり、攻撃を受けながら戦える能力を持つことが必要との考えによるものである。

2018NDS が敵の攻撃を受けながらも作戦を行う能力を重視していることは、公開された要約でも確認できる。すなわち、米軍が「攻撃を受けながらも、展開、生存、作戦、機動、戦力再生を行う陸海空、宇宙戦力」（下線部筆者）を優先すること、そのために、「集約された、堅固化されていないインフラストラクチャーから、小規模で、分散型で、強靭で、適応力のある基地使用法へのシフト」を必要としていること、そして、それを支えるための「強靭で、連携型の［指揮統制通信］ネットワーク」、「強靭で機敏な兵站」が必要と強調していることなどである[5]。また、こうした点は 2018NDS で導入された「グローバル作戦モデル」からも必要とされる。同モデルは、米軍の戦力態勢を、接触（contact）層、遅滞（blunt）層、増援（surge）層、本土（homeland）層の 4 つに分けたものである[6]。コルビーによれば、「接触層」は平素からのグレーゾーンに対応し、「遅滞層」は、中露による既成事実化戦略の実行に踏み切った際に、米国が有効に対応できるまでの間、「遅滞させ、弱体化し、理想的には拒否」するものであり、いずれもが、中露の脅威圏内部において作戦を行うことを前提とするためである[7]。

既成事実化を防ぐ上で重要になるのが競争段階における対応である。中国にせよ、ロシアにせよ、既成事実化を進めるには米国による軍事力による対応を引き出すことを回避しつつ行うことを目指すが、こうした状況を示す概念が米国防省の正式な用語法に存在しなかったことが大きな問題であった。2018NDS 公表の 2 か月後の 2018 年 3 月、統合参謀本部が公表した「統合キャンペーン実施に関する統合コンセプト」（JCIC）は、平和と戦争を排他的に捉える「二元論的概念」を排除することをうたい、米国と他国・非国家アクターとの関係性を理解する枠組みとして「協力」、「武力紛争未満の競争」、「武力紛争」からなる「競争スペクトラム（competition continuum）」を提起した[8]。JCIC の新規性はこの「武力紛争未満の競争（competition below the armed conflict）」概念を導入したことにあるが、JCIC は、これを「両立し得ない利益を有する」アクターが「これら利益を追求する上で公然とした紛争に訴えることを求めない」状態と定義し、その上で、米国は「当然に紛争につながりかねない手段」は使用しないとの条件の下、資源の制約や他の地域における政策目標とのバランスや優先順位付けを考慮しつつ、自らの戦略的立ち位置の維持や強化、競争相手の目標達成を阻止するといった考え方を示した[9]。

JCIC の作成に参加したフィリップ・ロハウスの説明によれば、JCIC は、「敵対国の行動様式が直接的な対応を引き起こす敷居より下で行われることに対して、どのように米軍のパワーを適用すべきか」という問題に対する解として作成されたという[10]。

もう一つ JCIC の重要な点は「キャンペーン実施（campaigning)」概念を導入したことである。一般的に、軍事用語としての「campaign」(「戦役」と訳されることが多い）は一般に「所定の時間・空間内の戦略的または作戦上の目標を達成することを目的とした、関係する一連の作戦」(米国防省用語辞典。下線部筆者）と定義されている。従来からある概念「campaign（戦役)」が事柄を示す名詞であるのに対して、JCIC は「競争のしばしば永続的な性格を強調」するために、継続的な動作を示す「campaigning」を用いた[11]。すなわち、従来の「campaign」が「所定の時間・空間内」であらかじめ計画され、これに基づき実施されるのに対して、JCIC の「campaigning」は「持続可能で受け入れ可能な成果」を達成するための「永続的な取り組みの一環」であり、「campaign」とは異なり「所定の時間・空間内」に限定されるものではない。むしろ、競争相手の行動や、米国側の対応に対する彼らの反応を見つつ、さまざまな制約要因をも加味しながら、次の対応を決定する。JCIC が「リジッドで、事前に決定された行動方針」は競争にはそぐわないとの認識をしているのは「campaigning」の動的で、インタラクティブ、継続的な性格を反映したものである[12]。さらに、JCIC は、競争スペクトラムをまたがって軍事的活動と非軍事的活動を連携させることを「統合キャンペーン実施（integrated campaigning)」として提唱していた[13]。

2018NDS で打ち出された、中露による既成事実化を阻止するために米軍自体が攻撃を受け得る範囲内において作戦を行うという考え方は、2022 年の NDS（以下、2022NDS）でも引き継がれている[14]。2022NDS は「潜在的敵対者が領土を奪い取ろうとする場所で侵略を抑止」するため「拒否のため態勢を最適化」するとして「拒否的抑止」を打ち出した。さらに、拒否的抑止を可能とするには「妨害に耐え、妨害の中で戦い、妨害から復旧する能力」が必要となる。これが「強靭性による抑止」であり、拒否的抑止から論理的に要請される。また、2022NDS は「キャンペーン実施」についても 1 節があらたに設けられ、米国の競争相手がグレーゾーンにおいて行う米国の国益を損ねる活動を「制限、頓挫させ、妨害させつつ米国、同盟国、パートナー国に有利に環境を変容させるため、複数のドメインと紛争スペクトラムをまたがって活発にキャンペーンを実施」するとした上で、その一環で同盟国やパートナー国と協力して「インフラストラクチャー、兵站、指揮統制、分散・移転、および動員」など危機や紛争時に必要となる「戦力要素」を構築、使用するとしている[15]。

2　米海兵隊「遠征前方基地作戦」（EABO）と「スタンドイン部隊」（SIF）

こうした NDS の方針を最も強く打ち出しているのは、2020 年 5 月、デービッド・バーガー総司令官（当時）が公表した「戦力デザイン 2030」（FD2030）の下、抜本的な改革を進める海兵隊である[16]。それは、海兵隊が「中国がもたらす、主として海洋の脅威」を海兵隊の戦力デザインや戦力組成を方向付ける「主たる基準となる脅威（pacing threat）」と位置付けて[17]、みずから「抜本的な変革」をもたらそうとしているためである[18]。

日本にでも言及されるようになってきた「遠征前方基地作戦」（EABO）や「スタンドイン部隊」（SIF）などの構想もこうした変革の取り組みの一環である。これらは敵対国による攻撃を受け得る範囲（海兵隊の用語法では「兵器交戦圏」（WEZ）という）の「沿海域（littorals）」においてどのように海兵隊が戦うべきかを示したものある。なお、この沿海域という言葉は、国防省の定義によれば陸地から作用可能な「海方向」と海上から作用可能な「陸方向」の両方の海と陸を含む地域を差し[19]、2016 年に海兵隊が公表した「海兵隊作戦コンセプト」でもホットスポットとしてその重要性が強調されていた[20]。海と陸を一体の作戦環境としてとらえるところに近年の海兵隊のアプローチの特徴が表れているが、わが国の南西諸島や南シナ海のみならず、イエメンのフーシ派が海上交通の安全を脅かす紅海などもこうした環境といえる。そして、海と陸の両方をまたがってシームレスに活動が可能なのは海兵隊を置いて他はないという点も海兵隊における議論では強調される点である。

なお、この EABO と SIF は、機動力があり、低シグネチャの小規模な部隊が、簡素・一時的な陸上の拠点を移動を繰り返しながら作戦を続けることが共通するが（表―1参照）、もともとは、EABO から SIF が「枝分かれしたもの」である[21]。また、SIF が EABO で想定される簡易・一時的な陸上の拠点である遠征前方基地（EAB）にお

表―1　遠征前方基地作戦（EABO）とスタンドイン部隊（SIF）

遠征前方基地作戦 **Expeditionary advance base operations**	■ 機動力があり、低シグネチャ、持続的で、整備・戦力維持が比較的に容易な海軍＝海兵隊遠征部隊 ■ 係争海洋域における簡易・一時的な陸上の拠点からの運用 ■ 海上拒否、制海支援、艦隊の補給支援を実施 ■ 遠征戦の一形態
スタンドイン部隊 **Stand-in forces**	■ 小規模、低シグネチャ、機動力、整備・戦力維持が比較的容易な戦力 ■ 競争相手の WEZ 内において、パートナーと協力、接受国主権の支援、悪意ある行動に対応 ■ 武力紛争時は近距離戦闘において交戦

（出所）Headquarters, U.S. Marine Corps, *Tentative Manual for Expeditionary Advanced Base Operations*, 2nd ed. (Washington, DC, February 2023), 1-2, E-7.

いて支援を受けて作戦を行うなど説明されており補完関係にあるといえよう[22]。

SIF・EABO については以下の点が指摘できる。第 1 は、SIF については情報をめぐる戦いにおける役割が最も重視されていることである。バーガー海兵隊総司令官は、2021 年 12 月の「スタンドイン部隊コンセプト」（以下、SIF コンセプト）公表に先立ち Proceedings 2021 年 11 月号に寄稿した論考において、そのエッセンスを、「小規模で、戦闘力があり、低シグネチャ、機動力がある」SIF が「頻繁かつ、予期で移動し、欺瞞も活用」することで、敵による探知や攻撃を回避しつつ、特定の地域において敵対国の兵員や兵器の発見、追跡を続けることにあると説明した。バーガーによれば、こうした活動は競争から武力紛争にいたるまで競争スペクトラムのあらゆる段階で行われ、得られた敵に関する知識は「武力紛争が始まった場合には、艦隊やその他統合戦力が迅速かつ効果的に攻撃を行い、敵を盲目にし、敵の海洋地域の使用を拒否して敵の計画を妨害し、SIF と艦隊が優位を持つその他の地域へと移動を強いる上で助けとなる」ものだという。バーガーはこうした海兵隊の活動を、自軍のために偵察を行うとともに、敵のこれを拒否する趣旨で「偵察・対偵察」（RXR）と名付けたのである[23]。海兵隊が EABO の検討を始めた初期においては、海兵隊が海軍の制海を支援、その一環として対艦攻撃能力を持つことの重要性に脚光が当てられていたが、その後の検討により、競争・武力紛争をまたがって行われる RXR こそが重要であると認識されるようになった[24]。

第 2 の特徴は SIF の活動については、武力紛争に至らない、競争段階での対応が重視されていることである。海兵隊関係者の議論においては、武力紛争が始まってしまうと部隊を係争地域に侵入させること自体が困難になることから、むしろ紛争前の段階で係争地に部隊を展開しておき、アクセスを確保するとともに、前方での海兵隊の活動を地域的な侵略の抑止に活用するべきであるという点が強調されるようになった[25]。これは、前項で説明した「キャンペーン実施」の考え方に沿ったものである。

第 3 に指摘できることは同盟国・パートナー国との協力が前提となっていることである。バーガーも上記の論考において、同盟国・パートナー国を SIF の「最重要な要素」と述べ、「沿海域における友邦との協力関係は SIF にとって中核的な必要条件」であると指摘した[26]。それは、そもそも「敵対国による悪意ある行動」が向けらえるのも米国の同盟国・友好国であり、SIF がこれに対応するためには「係争地域において同盟国・パートナー国とともに前方に留まる」ことが前提となるためである[27]。これら SIF の特徴は、2023 年に海兵隊が第 1 列島線上で行った各種演習にも反映されている（詳細は後述）。

歴史的な名称としての「遠征前方基地作戦」（EABO）

「遠征前方基地作戦」（EABO）という言葉は、我が国の報道等でも言及されるようになったものの依然として耳慣れないことは否めない。海兵隊はなぜこのような用語を使っているのであろうか。

合衆国法典第 10 編「軍隊」の第 8063 条（a）項は、海兵隊の第 1 の任務を「艦隊とともに、前方海軍基地（advanced naval bases）を確保、あるいは防衛」することと定めている。1898 年の米西戦争で米国は、キューバやプエルトリコ、フィリピンやグアムを獲得したが、そのことで遠隔の地に軍事力を展開することが必要となった。さらに、戦間期に作成された対日戦争計画において、太平洋で作戦を行う海軍艦艇の補給のため前方に基地ネットワークを設営し、その「防衛」に海兵隊を充てることが構想されるようになった。

ここで登場した概念が「前方基地」である。海兵隊の水陸両用作戦の基礎を形作ったアール・ハンコック・“ピート”・エリス海兵隊中佐による研究「ミクロネシアにおける前方基地作戦」は、予想される対日戦争において日本軍が防御を固めるミクロネシアの島嶼に上陸、占拠した上で、これを日本軍による奪還から守ることが必要であると主張した。なお、後世の人間の目からは「確保」、すなわち攻勢的な上陸作戦の側面のみ注目されることが多いが、この当時はむしろ「防衛」の面が重視されていた。太平洋戦争でも海兵隊は島嶼を日本軍の攻撃から「防衛」するための「防衛大隊（defense battalions）」を最大で 20 個編成し、ミッドウェー、ガダルカナル、マーシャル諸島などの各島嶼に配備した。なお、「確保」の必要性が重視されるのは、1933 年に艦隊海兵隊（FMF）が設置され、1934 年にエリスの研究を元に「上陸作戦暫定マニュアル」が作成されて以降である。

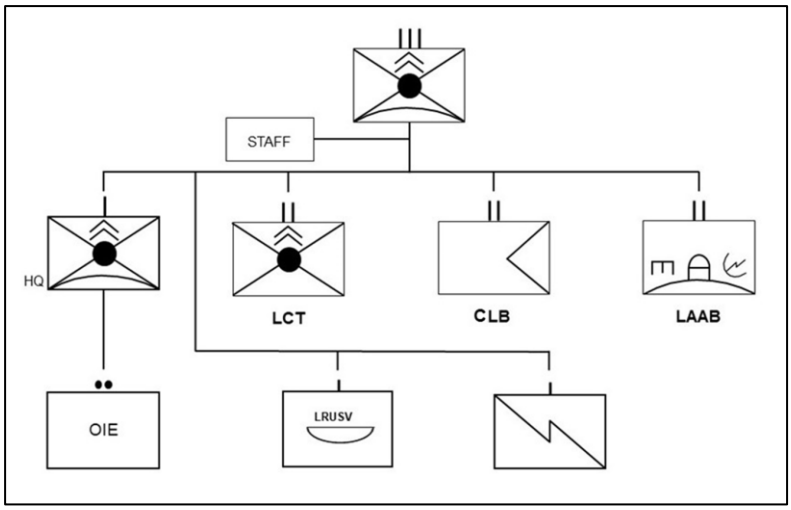
このように、戦間期にドクトリン化され、さらに日本との戦争において実行もされた「前方海軍基地」の「確保」と「防衛」が、戦後、米国の安全保障体制を形作った 1947 年国家安全保障法の規定に盛り込まれた結果が上記の第 8063 条（a）項の規定である。その意味で、EABO は海兵隊にとって、歴史的な成功体験を想起させる名称であり、そうした名称を用いることで EABO の海兵隊内の浸透を図ろうとした意図もあるのだろう。米陸軍が、2016 年に「マルチドメインバトル」（のちにマルチドメイン作戦に改称）を打ち出し、1980 年代のエアランドバトル（ALB）ドクトリンとの歴史的なつながりを強調したのと同様である。

第 4 に指摘できるのは、沿海域において、海兵隊が海上に対して様々な作戦を展開する拠点となる陸地を支配することが重要であることと、そのための陸上戦闘も等閑視されていないことである。この点は、前述の 3 つの点とは異なり、海兵隊が EABO や SIF に関して公表している文書には明示的に強調されていないが、後述するように島嶼部を確保するための陸上戦闘をテーマとした演習が行われていることからも明らかである。

第 5 は、作戦区域内に進出する上でも、また、WEZ――敵が攻撃することが可能な範囲――において作戦を持続させるため、また敵に対して優位な位置を確保するためにも、沿海域内部での頻繁な移動、場合によっては作戦域からの離脱も必要とされていることである。2023 年 5 月に公表された海兵隊 EABO 暫定マニュアル（TM EABO）第 2 版も、陸海空の様々な移動手段を駆使した「マルチモーダル」な手法により「沿海域機動（littoral movement）」を実現するとしている。たとえば、作戦区域外部から水陸両用艦や MV-22B により「中間集結地点」（ISB）に移動し、さらにそこからより前方へは中型揚陸艦やヘリコプターで移動を繰り返すなど、島嶼間、島嶼内での機動が想定されている[28]。

海兵隊では、こうした構想を前提として、沿海域における作戦に特化した海兵沿海域連隊（MLR）の

図―１　海兵沿海域連隊（**MLR**）の編制



（出所）Headquarters, U.S. Marine Corps, *Tentative Manual for Expeditionary Advanced Base Operations*, 2nd ed. (Washington, DC, February 2023), A-2.

新設も進められている。これは、2020 年 5 月の FD2030 において明らかにされたもので[29]、TM EABO によれば、監視・偵察、必要な「海洋地形（maritime terrain）」の確保、対水上戦、対空・対ミサイル防衛を行うもので、沿海域戦闘団（LCT）、沿海域防空大隊（LAAB）、および戦闘兵站大隊（CLB）等を編制中に持つ（図―１参照）[30]。

MLR の中核となる LCT は歩兵大隊を基幹とし、対艦ミサイル中隊を含む。これには、無人化車両にノルウェー・コングスベルグ社開発の海軍打撃ミサイル（NSM）を搭載した海軍海兵隊遠征対艦阻止システム（NMESIS）を配備する計画である。また、LAAB は、敵の攻撃圏内での作戦を前提に、一定の航空機・無人機システム、巡航ミサイルへの対処能力を持つ。さらに MLR には「沿海域内輸送」の能力を持つ兵站部隊として CLB も含まれる。また、こうした輸送のため、海軍は、中型揚陸艦（当初、軽水陸両用戦闘艦と呼ばれていた）を 18 から 35 隻を建造することを計画していたが[31]、それに対して、海兵隊は、2024 会計年度予算要求に際して、1 個 MLR あたり 9 隻を割り当てることを前提に 35 隻が必要であると主張している[32]。MLR の編制には長距離無人水上艇（LRUSV）小隊も含まれているが、TM EABO では沿海域で敵艦艇に対する ISR-T を行うなど RXR 活動に割り当てられることが想定されている[33]。これまで、歩兵連隊あるいは砲兵連隊の伝統的な編制をとってきた海兵連隊を、図―１に示すような前例のないものに改編することはバーガーが進めていた海兵隊の改編のドラスティックさを象徴するものとして受け止められた。

さて、MLR 改編の計画が明らかになった当初より、第 3 海兵師団隷下の 3 個連隊がその対象となることは予定されていた。バーガー総司令官の下、副総司令官（能力開発・統合担当）として改編を担当していたエリック・スミス海兵隊中将（当時。現海兵隊総司令官）は、2020 年 6 月 4 日付 USNI News に掲載されたインタビューで、最初に同師団の第 3 海兵連隊（ハワイ・カネオヘベイ）を MLR に改編し、演習等による検証により編制や装備に所要の変更を施したのち、同じく同師団で沖縄に所在する第 4 海兵連隊（キャンプシュワブ）と第 12 海兵連隊（キャンプハンセン）の MLR 改編に着手する予定を明らかにしていた[34]。また、スミスは「海兵隊のすべての作戦部隊がスタンドイン部隊になるわけでも

ない」として、海兵隊が、スタンドイン部隊の役割とともに、危機対応部隊の役割を引き続き担うこと、MLR 改編が第 3 海兵師団の 3 個連隊に限定されることを強調している[35]。それは、この 3 個連隊が、太平洋地域を担当し、海兵隊改編の「努力の焦点」と位置付けられる第 3 海兵遠征軍（III MEF）の隷下部隊であるためである[36]。ただし、MLR の LCT に含まれる 1 個歩兵大隊については、（これまでの第 4 海兵連隊や第 31 海兵遠征隊と同様）米本国から西太平洋に「ローテーション展開」を想定していることから[37]、各 MLR が行う各種活動をこれら米本国所在の部隊も経験することになる

なお、最初に MLR 改編を行うハワイの第 3 海兵連隊は、2022 年 3 月に第 3MLR に「名称変更（redesignate)」された後[38]、隷下部隊の LCT、LAAB、CLB の新編・改編など作業が行われ、2023 年 9 月 25 日から 28 日には SIF としての能力を確認するために行われた戦力デザイン統合演習を経て初期作戦能力（IOC）達成が確認された[39]。バーガー総司令官は、2023 年 4 月 18 日の上院軍事委員会公聴会において、2023 会計年度第 4 四半期（2023 年 6 月～9 月）中に NMESIS 6 基の第 3MLR への配備を行うと説明しており、IOC 達成はこの NMESIS 配備とも関係している。次に MLR 改編を行う第 12 海兵連隊は、2023 年 1 月 11 日、ワシントンで開かれた日米安全保障協議委員会で 2025 年までに MLR への「改編（reorganize)」を行うことが明らかにされ、2023 年 11 月 15 日に第 12MLR に「名称変更」された[40]。今後、同連隊は、LCT、LAAB、CLB 等隷下部隊の改編作業を進め、2025 年の IOC 達成を目指している[41]。なお、残る第 4 海兵連隊はグアムへ移転し、2027 年までに MLR 改編を行う予定であると報じられている。

3　2023 年活発化した第 1 列島線上の米海兵隊演習

（1）質的な変化を遂げる日本における演習

2023 年、海兵隊は第 1 列島線において EABO や SIF を前提とした演習を活発化させた。2 月 16 日からから 3 月 12 日にかけては、海兵隊と陸上自衛隊との実動訓練であるアイアンフィスト演習がはじめて日本で実施された。同演習はこれまでカリフォルニアのキャンプペンドルトンにおいて 16 回実施され、水陸機動団を中心に派遣された陸上自衛隊部隊が第 1 海兵遠征軍（I MEF）とともに島嶼部での作戦を想定した実動訓練を行ってきた。これに対して、2023 年の演習は、第 31 海兵遠征隊（31 MEU）と第 1 水陸機動連隊の隊員が日出生台演習場（大分県）での実弾射撃訓練、前方補給・給油地点（FARP）訓練[42]、衛生訓練等を行ったほか、徳之島では米海軍揚陸艦グリーンベイおよび海上自衛隊輸送艦「おおすみ」からの着上陸訓練を行った[43]。さらには喜界島では、「島嶼の確保」を想定して陸上自衛隊第 1 空挺団隊員 100 名余りが米空軍第 36 輸送航空隊（横田基地）の C-130J 2 機と航空自衛隊第 2

2023 年 10 月 15 日、RD23 の一環で石垣空港に到着した米海兵隊の最新式対空レーダーAN/TPS-80 G/ATOR（U.S. Marine Corps photo by Cpl. Tyler Andrews）

輸送航空隊の C-１ 1 機か降下訓練を行った[44]。同演習については、海兵隊や陸上自衛隊のみならず、米空軍や航空自衛隊、海上自衛隊など参加部隊が拡大することで、陸海空のドメインをまたがるものへと拡大した。

海兵隊と自衛隊の演習としては、レゾリュート・ドラゴン 23（RD23）が、7 月 10 日から 17 日にかけて指揮所演習が、10 月 14 日から 31 日にかけて実動演習が行われた[45]。レゾリュート・ドラゴン（RD）演習は、2017 年 8 月と 2019 年 12 月の 2 回、北海道で陸上自衛隊と海兵隊により行われたノーザンヴァイパー演習が[46]、2021 年以降日本各地に分散して行われるようになったものである。RD23 では、第 12 海兵連隊第 3 大隊の高機動ロケット砲システム（HIMARS）が、岩国基地所属の KC-130J により嘉手納基地から厚木基地を経由して北海道の計根別飛行場に展開する HIMARS 緊急侵入（HIRAIN）訓練を行った後[47]、近傍の矢臼別演習場に移動して、陸上自衛隊の多連装ロケットシステム（MLRS）とともに射撃を行った[48]。

また、RD23 では、航空自衛隊の C-2 輸送機により、海兵隊の最新式レーダーAN/TPS-80 G/ATOR を那覇基地から石垣島まで空輸する訓練も行われた[49]。G/ATOR は航空監視、防空、航空管制の任務を行うマルチロールレーダーで、砲弾、巡航ミサイル、迫撃砲弾、有人・無人機への対処能力を持ち、MLR が敵脅威圏内で作戦を行う上で重要なアセットとなる[50]。今回の展開は、先島諸島への G/ATOR 展開としても、あるいは航空自衛隊機による展開といても初めてのものとなった[51]。

西部方面隊を中心に実施された RD23 は九州各地の演習場で実動訓練が行われたが、なかでも、第 2 海兵連隊第 2 大隊が MV-22B により霧島演習場から日出生台演習場に展開し[52]、十文字原演習場では MV-22B への別の機体からの燃料補給や地上のタンクからの燃料補給を行った[53]。演習場間の MV-22B による移動はまさに TM EABO にいう沿海域機動であるし、演習場おける給油も、固定的な大規模な基地に依存できない EABO において航空作戦を維持する上で必要不可欠な FARP の活動を演練したものである。

ビル・マトリー第 3 海兵遠征旅団作戦部長によれば、RD23 はそれまでの RD と比べて、先島諸島に部隊や調整ノードを展開するなど南西シフトを強化した一方、日米の調整機能も拡充した点が新しいと

いう。そして、RD23 はもはや「射撃場における静的な射撃訓練や基本的な知見の交換」にとどまらず「主要な海洋地形における現実的なミッションリハーサル」、「中国による侵略行為を抑え込むため、ともに活動する際に何が可能か」を示すものとなっている[54]。

また、第 1 回の RD が行われた 2021 年には、御殿場市にあるキャンプ富士諸職種協同訓練センター（CATC）において、米本土から沖縄の第 4 海兵連隊に部隊展開プログラム（UDP）により展開する 1 個歩兵大隊のうち 2 個中隊が参加して 6 月の 1 カ月かけて行うシンカ演習が始められた[55]。海兵隊はこれまで 3 回行われた同演習[56]を「米海兵隊と陸上自衛隊の間で行われる最大の対抗演習」と位置付けているが[57]、それは、海兵隊演習部隊が、北富士演習場において陸上自衛隊の部隊訓練評価隊（北富士駐屯地）の交戦訓練用装置を使用し、同評価隊の評価支援隊（滝ケ原駐屯地）の対抗部隊を相手に実戦に即した訓練を行うものであるためである。

CATC 司令官としてシンカ演習実現を主導したロバート・ボーディッシュ海兵隊大佐は『朝日新聞』とのインタビューで「北富士演習場は内陸にありますが、島に見立てることができました。海兵隊のヘリコプターは、（日本本土に見立てた）沖縄の海兵隊基地から（駐屯地がある沖縄本島に見立てた）沼津ビーチに移動し、さらにそこから第 1 列島線の内側にある場所（北富士演習場）に向かうというシナリオでした」と述べている。ボーディッシュ大佐の説明からは、シンカ演習は島嶼部における陸上戦闘を想定した演習であること、富士地区の演習場の位置関係が EABO が沿海域機動として想定する島嶼間の移動を再現する上で適していたことがうかがえる[58]。

さらに、2023 年 11 月 15 日から 12 月 15 日にかけて海兵隊は CATC においてスタンドイン部隊演習（SIFEX24）を実施した。前年の SIFEX23 は 2022 年 12 月に沖縄の中部訓練場において第 2 海兵連隊第 1 大隊を演習部隊に行われたが、今回の SIFEX24 はこれを富士地区に場所を移して実施したものである[59]。同演習は「当該地域の同盟国やパートナー国防衛のために緊急に戦闘力を投射するためのリハーサル」と位置付けられ、第 4 海兵連隊に UDP 展開した第 2 海兵連隊第 2 大隊と第 7 海兵連隊第 2 大隊の 2 個大隊が演習部隊と対抗部隊に分かれ、島嶼部に演習部隊が経空侵入し、対抗部隊と陸上戦闘を行い、

SIFEX24 において CH-53E から展開する第 7 海兵連隊第 2 大隊員（2023 年 12 月 5 日）（U.S. Marine Corps photo by Cpl. Kyle Chan）

さらに別の島嶼に再展開するまでを演練した[60]。また、SIFEX24 は、内容的にも CH-53E や MV-22B による部隊の侵入と撤収[61]、AH-1Z 攻撃ヘリコプターによる近接航空支援（模擬）[62]、負傷者の治療・後送や従軍牧師によるケアなど[63]「海兵空地任務部隊すべての要素を含む」ものとなっている[64]。また、海兵隊航空部隊が対潜ヘリコプターに対して燃料やソノブイの補給を行う訓練なども行われたが[65]、これも TM EABO で EAB の役割と位置付けられる「対潜水艦戦を支援するための作戦」に関連したものである[66]。SIFEX24 は北富士演習場および東富士演習場の充実した演習環境を活用し、「師団レベルの演習」でありながらも本来的には「軍種レベルの訓練演習」（SLTE）を担当する MAGTF 訓練コマンド（MAGTF TC。カリフォルニア州 29 パームズ）から派遣されたチームが演習統裁部や演習部隊の各指揮階梯に配置され、演習の統制、評価、コーチングを行った。こうした点について、第 4 海兵連隊関係者は「米本土にわざわざ戻ることなく第 1 列島線内に留まったまま［本来は 29 パームズの演習場で MAGTF TC の支援を受けなければ得られない］質の高い訓練を受けることができた」と評価している[67]。かつて CATC は、第 12 海兵連隊第 3 大隊に UDP 展開する砲兵中隊の射撃訓練など基本的な訓練の場を提供するものと捉えられていたが、海兵隊が中国の軍事的脅威への対処を重視するにつれ、陸上自衛隊との協力の下、島嶼部における陸上戦闘や沿海域機動を演練する場として重要性を増している。

このように日本における海兵隊の演習は、過去 3 年間に戦いのための「ミッションリハーサル」として実戦指向を強め、陸海空のドメインへと拡大、参加部隊も拡大するなど、大きく質的な変化を遂げている。

（2）「統合キルウェブ」を重視したフィリピンにおける演習

日本以外で演習の取り組みが強化されているのはフィリピンである。2023 年 4 月 11 日から 28 日にかけて行われたバリカタン 23 演習はフィリピン側が 5,400 人、米国側が 12,200 人の合計 17600 人（前年のバリカタン 22 演習では 9000 人が参加）参加し、同演習として最大の規模となった[68]。同演習ではマキンアイランド水陸両用即応群（母港：サンディエゴ）がフィリピン軍とともに「統連合接岸兵站支援（CJLOTS)」を行ったが、ここでは「一時的ではあるが米比共同の多機能チーム」を編成し、燃料の移送、重装備の陸揚げ、車両の運行などの「揚陸艦からの卸下」を行ったという。こうした能力は米比軍が「危機と緊急事態に対して短時間で対応」できるため必要なのだとされる[69]。その後、強襲揚陸艦マキンアイランドは、パラワン島近海においてフィリピン海軍艦艇との訓練や、パラワン島において急襲上陸訓練を行っている[70]。バリカタン 23 演習では、第 3MLR も前年のバリカタン 22 演習に引き続き参加したが、前年とは異なり防空部隊や兵站部隊を含む連隊全体が参加し[71]、MV-22B による島嶼への経空侵入（同時に米陸軍の HIMARS の陸軍揚陸艇からの揚陸訓練も実施）[72]、米比での射撃要求と榴弾砲の射撃訓練[73]、補給用ドローンの実験[74]などを実施した。

さらに、今回の演習では、艦艇を標的として撃沈する SINKEX が、バリカタン演習としては初めて行われた。SINKEX は 4 月 26 日にルソン島西海岸サンアントニオ沖において行われたもので、除籍されたフィリピン海軍のコルベット艦に対し、米陸軍の HIMARS、米比陸軍の榴弾砲、米陸軍の AH-64[75]、米空軍の F-16、AC-130J、フィリピンの FA-50 攻撃機、米海兵隊の F-35B が攻撃を行った[76]。ただし、SINKEX で使用された兵器はもっぱら陸上攻撃用のもので、海上の移動目標を追尾できる対艦ミサイルではないなど、海兵隊が構想する、陸上からの海上拒否作戦を完全に再現したものではなかった[77]。そのため、目玉であった HIMARS から発射したロケットは海流により漂流した標的艦を外している。しかし、SINKEX の目的はミサイルや砲弾を標的に当てること自体ではなく、「海上の目標を、遠征前方基地拠点の陸上のセンサーで感知して、その情報を海兵師団の戦闘作戦センターに伝達し、統連合センサー・情報融合センターで補強し、10 桁の座標データとして両国の地上と航空機の火力に伝達」（米太平洋海兵隊）することにあったのだという[78]。目標の発見から射撃までのプロセスを途切れることなく進める、いわゆる「キルチェーンを完成させる（complete the kill chain）」ことが SINKEX のカギであったということになるが、「米海兵隊の指揮統制戦センサーネットワークにより、各プラットフォームが目標の識別、射撃諸元の計出、精密統合射撃を行うことが可能となった」というように、そこでは米海兵隊がハブとなった[79]。その点でも、海兵隊が他軍種のための ISR-T を担うという、RXR のうち「R（偵察）」の能力を確認する演習ともなった。このようにバリカタン演習は、海洋戦域での戦闘を前提とした訓練を強化するなど、米比軍の間での、訓練の「複雑さとハイエンドな戦闘ミッションセットを増大」させたものとなっている[80]。その点で、ブライアン・ドンロン海兵隊中佐も、バリカタン演習では「米海兵隊、米陸軍、フィリピン軍がさまざまな先進的なセンサーと兵器システムを活用して海上拒否作戦のリハーサルを行う」とともに、海兵隊の「統合キルウェブへの貢献を示した」と評価している[81]。

2023 年 4 月 23 日、バリカタン演習の一環として、米比部隊が空中強襲により確保したバタン島に上陸する米陸軍の HIMARS（U.S. Marine Corps photo by Cpl. Paley Fenner）

今回のバリカタン演習の特徴はルソン島の北方、台湾との間にあるバシー海峡上の島嶼にまで演習が拡大したことである。ここでは、米海兵隊の第 3MLR と米陸軍の第 25 歩兵師団の隊員が、フィリピン軍部隊とともにルソン島北方のバシー海峡に浮かぶカラヤン島に移動し、そこからさらに同海峡の中間に位置するバタン島に海兵隊の MV-22B により侵入、確保した上で、陸軍の HIMARS が同島に上陸す

るという訓練が行われた。演習に参加したジョセフ・ライアン第 25 歩兵師団長はバシー海峡の島嶼において米比合同で訓練を行うのは「我々は体制が整い、能力があり、備えができている。我々には偉大なパートナシップがあり、本気である」というメッセージングを中国に対して行うためであると説明した[82]。こうした動きは、米比防衛協力強化協定（EDCA）（2014 年締結）に基づき米軍がアクセスできる施設に 2023 年に追加された 4 か所のうち 3 か所がルソン島北部にあることと合わせて[83]、台湾に対する軍事的圧力を強める中国に対して、フィリピンを一つの足掛かりとして牽制を行うものとして受け止められている[84]。

さらに、フィリピンでは、日本におけるレゾリュート・ドラゴン 23 演習終了（10 月 31 日）から間もなく、11 月 9 日から 20 日にかけて、米比の海兵隊によるカマンダグ 7 演習が行われた。ここでも、ハワイの第 3MLR が、ルソン島北部地域に派遣され、隷下部隊に分かれてフィリピン海兵隊とともに活動を展開した[85]。第 3 沿海域兵隊大隊（第 3LLB）は、地元の防災当局との人道支援・災害救援演習、地元学校訪問[86]、所属の医官による地元診療所での医療機器の操作方法や手技の指導を行った[87]。また、第 3LCT も、ランドナビゲーションや伏撃、斥候、密林におけるサバイバル等の訓練をフィリピン海兵隊とともに行った[88]。さらに、カマンダグ 7 演習には、第 1 海兵遠征軍（I MEF）から海兵ローテーション部隊（東南アジア）（MRF-SEA）もパラワン島に展開し、フィリピン海兵隊ともに、沿岸防衛訓練、密林におけるサバイバル訓練、CBRN 対処訓練などを行っている[89]。

この MRF-SEA は、I MEF の第 11MEU（カリフォルニア州キャンプペンドルトン）の指揮エレメントを中心にその一部が派遣される形での東南アジア諸国への展開を 2022 年から行っている[90]。海兵隊は、MRF-SEA を SIF と位置付け、「小規模、軽量、機敏、戦闘力のある」戦力として「つねにそこにいる」、「敵の兵器交戦圏内部において暮らし、作戦を行う」ものとしている（スミス現海兵隊総司令官）。そして、その中でも、同盟国・パートナー国の軍隊との相互運用性の向上や、敵の WEZ 内部において情報を収集し、米軍全体や同盟国軍にそのデータを伝達することが重視されている[91]。MRF-SEA が SIF として敵脅威圏内部で ISR-T を行うことに関連した取り組みとしては、10 月 9 日から 12 日にかけてフィリピン・ルソン島南端部のレバノン海岸において行った海洋ドメイン認識（MDA）訓練がある。ここでは、民生用の海上監視レーダーからのデータと、小型無人機システム RQ-20B PUMA の動画により洋上の標的を識別し、統合端末航空管制官により航空攻撃を誘導するという訓練が行われた[92]。

以上みてきたように海兵隊を含む米軍が、日本とフィリピンで台湾を挟んで活発に演習を展開していることは、2022NDS で「時間をかけて戦略と整合した目的を達成するため論理的に結びついた軍事活動を実施、連携」と定義される「キャンペーン実施（campaigning）」にあたり[93]、そこには「常にあらゆる方法で抑止を行い、人民解放軍が『今日こそ、それ［注：台湾侵攻］を試してみよう』と決して言

い出すことがないようにする」（キャスリーン・ヒックス国防副長官、2023 年 3 月 1 日付ツイート）という意図が込められているのであろう[94]。

まとめ――「ホームチーム」としての米海兵隊と同盟国

近年の海兵隊関係者の議論に繰り返し登場する言葉の一つに「ホームチーム（home team）」がある[95]。これは、2019 年に海兵隊の海兵隊史課から出版されたアンソロジー『米海軍力のレガシー』に寄せた序文において米国の海軍戦術の専門家として知られた故ウェイン・ヒューズ海軍大学院（NPS）教授が沿海域作戦においては「ホームチームに優位性がある（the home team has the advantage）」と指摘したことによる[96]。「ホームチーム」であることが重要なのは、沿海域が「すべての作戦・地理的ドメインが交差するダイナミック、複合的な戦闘環境」で、これらに関する「現地の知識（local knowledge）」がクリティカルになるためであるが[97]、これは、彼が『艦隊戦術と海軍作戦』（第 3 版、2018 年）等の過去の著作で「海軍作戦の 6 つの要諦（six cornerstones of naval operation）」として示したものに、海兵隊に向けて「7 番目の要諦」として追加したものである[98]。

そもそも、西太平洋における米国と中国を比較すれば、地理的特性から中国が「ホームチーム」であり、米国は「アウェーチーム」である。遠方の米本土より係争地に対して外征作戦を行う米国には本来的に「アウェーチーム」が持つ不利性が付きまとう。そのため、ヒューズも「地形、人々、人々の文化を知悉することで成功の条件を整える」ことが必要であると訴えていた。そこで重要になるのが同盟国やパートナー国であり、これらとの関係を構築することで「領土を奪い取ろうとする同格国による企てに対して海兵隊がホームチームの優位性を得ることができる」のだという[99]。そして、その点からいえば、現在、海兵隊を含め米軍が行っているのは、それが人道支援・災害救援演習であれ、あるいは HIMARS の射撃であれ、本来「アウェーチーム」である米国が「ホームチーム」である地域の同盟国と協働して関係を強化し、それによって「アウェーチーム」が持つ不利さを克服すると同時に「ホームチーム」としての「優位性」を強化するための取り組みであるといえよう。「同盟国を持つ国は栄え、持たない国は衰亡する」として米国にとっての同盟国の重要性を説いたのはジェームズ・マティス元国防長官であるが、米国の対中戦略にとって同盟国が中核的な構成要素となっていることはこの一点からも明らかであろう[100]。

[1] U.S. Indo-Pacific Command, *Seize the Initiative: Extension and Modification of the Pacific Deterrence Initiative (PDI) Executive Summary* (Honolulu, 2022), 4, Defense One, https://www.defenseone.com/policy/2022/05/report-seize-

initiative/366380/.

[2] House Armed Services Committee, S*tatement of Admiral John C. Aquilino, U.S. Navy, Commander, U.S. Indo-Pacific Command, U.S. Indo-Pacific Command Posture*, 118th Cong, 1st sess. (April 18, 2023), 1.

[3] Senate Armed Services Committee, *Testimony before the Senate Armed Services Committee Hearing on Implementation of the National Defense Strategy by Elbridge A. Colby*, 116th Cong., 1st sess., January 29, 2019, 4, 5.

[4] Ibid., 6.

[5] Department of Defense, *Summary of the 2018 National Defense Strategy of the United States of America: Sharpening the American Military's Competitive Edge* (Washington, DC, 2018), 6, 7.

[6] Ibid., 7.

[7] Senate Armed Services Committee, *Testimony by Elbridge A. Colby*, 6.

[8] Joint Chiefs of Staff, *Joint Concept for Integrated Campaigning* (Washington, DC, 2018), 4, 7, 8.

[9] Ibid., 8, 9.

[10] Phillip Lohaus, "A New Blueprint for Competing below the Threshold: The Joint Concept for Integrated Campaigning," *War on the Rocks*, May 23, 2018, https://warontherocks.com/2018/05/a-new-blueprint-for-competing-below-the-threshold-the-joint-concept-for-integrated-campaigning/.

[11] Ibid., 6.

[12] Ibid., 19.

[13] Joint Chiefs of Staff, *JCIC*, 6.

[14] Department of Defense, *2022 National Defense Strategy of the United States of America* (Washington, DC, 2022), 8.

[15] Ibid., 12.

[16] U.S. Marine Corps, *Force Design 2030* (Washington, DC, 2020).

[17] David H. Berger, "The Case for Change: Meeting the Principal Challenges Facing the Corps," *Marine Corps Gazette*, 104, no. 6 (June 2020): 8. 「pacing threat」の概念については、菊地茂雄「米国防計画における『Pacing Threat』としての 中国」『NIDS コメンタリー』第 191 号（2021 年 9 月 2 日）＜https://www.nids.mod.go.jp/publication/commentary/pdf/commentary191.pdf＞、1～2 頁参照。

[18] U.S. Marine Corps, *Force Design 2030*, 1, 2.

[19] Joint Chiefs of Staff, *Department of Defense Dictionary of Military and Associated Terms* (Washington, DC, 2021), s.v. "littoral."

[20] U.S. Marine Corps, *Marine Operating Concept* (Washington, DC, 2016), 5.

[21] David H. Berger, *Force Design 2030*, 3.

[22] U.S. Marine Corps, *Commandant's Planning Guidance* (Washington, DC, 2019), 10.

[23] David H. Berger, "A Concept for Stand-in Force," *Proceedings*, 147, no. 11 (November 2021): 18.

[24] 対艦攻撃能力から RXR へと SIF の重要性が変化したことについては、以下を参照。菊地茂雄「米軍における情報戦概念の展開（下）――米海兵隊『情報』戦闘機能と『21 世紀型の諸兵科連合』」『NIDS コメンタリー』第 268 号（2023 年 7 月 27 日）、12～15 頁。

[25] 菊地茂雄「沿海域作戦に関する米海兵隊作戦コンセプトの展開―『前方海軍基地』の『防衛』と『海軍・海兵隊統合（Naval Integration）』―」『安全保障戦略研究』第 1 巻第 1 号（2020 年 8 月）、72～73 頁。

[26] Berger, "A Concept," 18, 19.

[27] U.S. Marine Corps, *A Concept for Stand-in Forces* (Washington, DC, 2021), 1.

[28] Headquarters, U.S. Marine Corps, *Tentative Manual for Expeditionary Advanced Base Operations*, 2nd ed. (Washington, DC, February 2023), 6-14–6-16.

[29] Berger, *Force Design 2030*, 5, 10.

[30] Headquarters, U.S. Marine Corps, *TM EABO*, A-1–A-3. ただし、実際に編制された第 3MLR の編制をみると兵站大隊は「沿海域兵站大隊」（3dLLB）となっている。
[31] Sam LaGrone, "Draft Proposal for 'Affordable' Medium Landing Ship Out to Shipbuilders," October 16, 2023, UNIS News, https://news.usni.org/2023/10/16/draft-proposal-for-affordable-medium-landing-ship-out-to-shipbuilders.
[32] Mallory Shelbourne, "Marine Corps Requirements Call for 9 Light Amphibious Ships per Regiment," February 12, 2023, USNI News, https://news.usni.org/2023/02/14/marine-corps-requirements-call-for-9-light-amphibious-ships-per-regiment; and Senate Armed Services Committee, *Statement of General David H. Berger Commandant of the Marine Corps on the Posture of the United States Marine Corps before the Senate Committee on Armed Services April 18, 2023*, 118th Cong., 1st sess., 1.
[33] Headquarters, U.S. Marine Corps, *TM EABO*, 7-9.
[34] Megan Eckstein, "Marines Testing Regiment at Heart of Emerging Island-Hopping Future," *USNI News*, June 4, 2020, https://news.usni.org/2020/06/04/marines-testing-regiment-at-heart-of-emerging-island-hopping-future.
[35] Eric Smith, "Stand-in Forces Adapt or Perish," *Proceedings*, 148, no. 4 (April 2022): 21.
[36] David H. Berger, *38th Commandant's Planning Guidance* (Washington, DC: U.S. Marine Corps, 2019), 3.
[37] Headquarters, U.S. Marine Corps, *TM EABO*, A-4.
[38] "Redesignated: 3rd Marine Regiment Becomes 3rd Marine Littoral Regiment," March 3, 2022, U.S. Marine Corps, https://www.marines.mil/News/News-Display/Article/2965735/redesignated-3rd-marine-regiment-becomes-3rd-marine-littoral-regiment/
[39] Anne Pentaleri, "3d MLR Paves the Way with Force Design 2030 Capabilities," November 1, 2023, 3rd Marine Division, https://www.3rdmardiv.marines.mil/News/News-Article-Display/Article/3575612/3d-mlr-paves-the-way-with-force-design-2030-capabilities/ "Marine Corps declares IOC for Hawaii-based 3rd MLR," *Inside the Navy*, October 18, 2023, Factiva.
[40] "12th Marine Regiment Will Redesignate to 12th Marine Littoral Regiment November 15," October 16, 2023, Marine Forces Pacific, https://www.marforpac.marines.mil/News/Press-Releases/Announcement/Article/3559155/12th-marine-regiment-will-redesignate-to-12th-marine-littoral-regiment-november/; and "12th Marine Regiment Redesignates to 12th Marine Littoral Regiment," November 14, 2023, U.S. Marine Corps, https://www.marines.mil/News/Press-Releases/Press-Release-Display/Article/3588984/12th-marine-regiment-redesignates-to-12th-marine-littoral-regiment/.
[41] 2023 年 4 月 18 日の上院軍事委員会公聴会において、バーガー総司令官は、海兵隊は、2030 年までに 14 個中距離ミサイル中隊を保有する計画（3 個を 3 つある MLR に 1 つずつ配置、残り 11 個を米本土に配置）で、2025 会計年度中に 5 個中隊と 1 個大隊司令部を編成することで IOC を達成すると説明している。日米安全保障協議会で 2025 年までに第 12 海兵連隊を MLR に「改編」するとされているのは、第 12MLR において中距離ミサイル中隊を持つ LCT を立ち上げ IOC を獲得することを指しているものと思われる。
[42] "Iron Fist 23 Forward Arming and Refueling Point [Image 1 of 13]," February 17, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/7640300/iron-fist-23-forward-arming-and-refueling-point.
[43] "Iron Fist 23 amphibious assault [Image 1 of 12]," March 3, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/7677517/iron-fist-23-amphibious-assault; "Iron Fist 23 Amphibious Assault [Image 12 of 14]," March 3, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/7674224/iron-fist-23-amphibious-assault; and "Iron Fist 23 Amphibious Assault [Image 14 of 14]," March 3, 2023, DIVDS, https://www.dvidshub.net/image/7674261/iron-fist-23-amphibious-assault.
[44] "Iron Fist 23: USAF And JGSDF Conduct Island Seizure Training," March 8, 2023, Yokota Air Base, https://www.yokota.af.mil/News/Article/3322109/iron-fist-23-usaf-and-jgsdf-conduct-island-seizure-training/.
[45] 陸上幕僚監部「令和５年度国内における米海兵隊との実動訓練（レゾリュート・ドラゴン２３）前段（指揮所演習）の概要

について」（2023 年 6 月 27 日）＜https://www.mod.go.jp/gsdf/news/press/2023/pdf/20230627.pdf＞、陸上幕僚監部「令和５年度国内における米海兵隊との実動訓練（レゾリュート・ドラゴン２３）後段（実動訓練）の概要について」（2023 年 8 月 29 日）＜https://www.mod.go.jp/gsdf/news/press/2023/pdf/20230829.pdf＞。

[46] "Northern Viper Kicks Off for the First Time Ever," August 4, 2017, USFJ, https://www.usfj.mil/Media/Press-Releases/Article-View/Article/1278341/northern-viper-kicks-off-for-the-first-time-ever/. 北海道防衛局「国内における米海兵隊との実動訓練（レゾリュート・ドラゴン）に関する訓練計画概要について ※旧『ノーザンヴァイパー』」＜https://www.mod.go.jp/rdb/hokkaido/thiruto/index.html＞。

[47] "Resolute Dragon 23 FTX 3/12 HIRAIN at JASDF Kenebetsu Airfield [Image 6 of 13]," October 21, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/8089800/resolute-dragon-23-ftx-3-12-hirain-jasdf-kenebetsu-airfield; Flight Radar 24, https://www.flightradar24.com/2023-10-21/04:27/20x/SUMO10/; and Flight Radar 24, https://www.flightradar24.com/2023-10-21/01:25/1x/SUMO10/.

[48] "Resolute Dragon 23: HIMARS,M270 MLRS Bilateral Live-fire at Yausubetsu [Image 29 of 38]," October 27, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/8113052/resolute-dragon-23-himarsm270-mlrs-bilateral-live-fire-yausubetsu.

[49] "Resolute Dragon 23 | U.S. Marines and JASDF fly radar to Camp Ishigaki [Image 13 of 15]," October 15, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/8074901/resolute-dragon-23-us-marines-and-jasdf-fly-radar-camp-ishigaki.

[50] "Ground/Air Task Oriented Radar," Program Executive Officer Land Systems, https://www.peols.marines.mil/Programs/Ground-Air-Task-Oriented-Radar/.

[51] Savannah Mesimer, "III Marine Expeditionary Force, JGSDF Western Army Complete Exercise Resolute Dragon 23 FTX," DVIDS, https://www.dvidshub.net/news/456834/iii-marine-expeditionary-force-jgsdf-western-army-complete-exercise-resolute-dragon-23-ftx.

[52] "Resolute Dragon 23 FTX | 1st MAW Extracts 3d MarDiv from Kirishima [Image 11 of 25]," October 25, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/8098814/resolute-dragon-23-ftx-1st-maw-extracts-3d-mardiv-kirishima; and "Resolute Dragon 23 FTX | 1st MAW Extracts 3d MarDiv from Kirishima [Image 25 of 25]," October 25, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/8098828/resolute-dragon-23-ftx-1st-maw-extracts-3d-mardiv-kirishima.

[53] "Resolute Dragon 23 FTX | VMM-262 LAT and ADGR [Image 6 of 16]," October 19, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/8082761/resolute-dragon-23-ftx-vmm-262-lat-and-adgr; and "Resolute Dragon 23 FTX | 1st MAW conduct FARP Training [Image 1 of 7]," October 25, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/8093502/resolute-dragon-23-ftx-1st-maw-conduct-farp-training.

[54] Bill Matory and Benjamin Van Horrick, "Resolute Dragon: Reassurance, Deterrence, and a Call for Coordination," *War on the Rocks*, December 6, 2023, https://warontherocks.com/2023/12/resolute-dragon-reassurance-deterrence-and-a-call-for-coordination/.

[55] Frank Andrews, "As Champion of Force-on-Force Training with US Marines, Japanese Colonel Paid 'Political' Price'," S*tars and Stripes*, January 16, 2023, https://www.stripes.com/theaters/asia_pacific/2023-01-15/kondo-japan-marines-force-on-force-8775224.html.

[56] "Exercise Shinka," September 30, 2021, 3rd Marine Division, https://www.3rdmardiv.marines.mil/Photos/igphoto/2002864600/; and "Exercise Shinka 22.1," June 30, 2022, U.S. Marine Corps, https://www.marines.mil/News/Marines-TV/videoid/857351/?dvpTag=Expeditionary+Advanced+Base+Operations; and "Shinka 23."

[57] "Shinka 23: Kilo Company D...," June 22, 2023, U.S. Marine Corps, https://www.marines.mil/Photos/igphoto/2003245669/.

[58] シンカ演習が報道されることは稀であるが、国内では『朝日新聞』の牧野愛博記者が、同演習の発足を主導したボーディッシュ元 CATC 司令官と近藤力也・元部隊訓練評価隊長のインタビューを元に、立ち上げの経緯を詳しく報じている。牧野愛博

「レゾリュート・ドラゴンの裏で　富士の裾野で続く米海兵隊の演習とは」2023 年 10 月 14 日、朝日新聞デジタル＜https://www.asahi.com/articles/ASRBD7DHKRB9UHBI00Z.html＞、牧野愛博「『鉄が鉄を鍛える』喜んだ米海兵隊司令官　陸自元幹部に贈った勲章」2023 年 10 月 18 日、朝日新聞デジタル＜https://www.asahi.com/articles/ASRBK31Y4RBHUHBI00M.html＞、牧野愛博「海兵隊と陸自のガチンコ勝負　日米訓練『レゾリュート・ドラゴン』と『シンカ』違いは」2023 年 11 月 1 日、朝日新聞 GLOBE+ ＜https://globe.asahi.com/article/15042600＞。

[59] “Stand-in Force Exercise [Image 1 of 6],” December 13, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/7553718/stand-force-exercise.

[60] “SIFEX | Force on Force [Image 5 of 5],” December 5, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/8151557/sifex-force-force; and “SIFEX 24 | 2/7 Ambush [Image 7 of 7],” December 5, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/8151784/sifex-24-2-7-ambush.

[61] “SIFEX 24 | 2/7 Air Insert [Image 14 of 14],” December 5, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/8153030/sifex-24-2-7-air-insert.

[62] “SIFEX 24 SIMCAS [Image 7 of 10],” December 2, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/8147119/sifex-24-simcas.

[63] “SIFEX 24 | Casualty Evacuation [Image 10 of 10],” November 30, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/8145225/sifex-24-casualty-evacuation.

[64] “SIFEX | Force on Force [Image 5 of 5].”

[65] “SIFEX 24 | HMH-466, HSM-51 ADGR [Image 10 of 14],” December 6, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/8153678/sifex-24-hmh-466-hsm-51-adgr.

[66] U.S. Marine Corps, *TM EABO*, 7-12.

[67] “Sara Bobrowski, “MAGTF Stand-In Force Exercise Empowers Small-Unit Leaders, Increases Readiness in the Indo-Pacific,” December 15, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/news/460024/magtf-stand-force-exercise-empowers-small-unit-leaders-increases-readiness-indo-pacific.

[68] “Philippine, U.S. Troops to Hold Largest Ever Balikatan Exercise from April 11 to 28,“ April 4, 2023, U.S. Embassy in the Philippines, https://ph.usembassy.gov/philippine-u-s-troops-to-hold-largest-ever-balikatan-exercise-from-april-11-to-28/; and “U.S. and Philippine Forces Successfully Conclude 37th Balikatan,” April 8, 2022, U.S. Embassy in the Philippines, https://ph.usembassy.gov/u-s-and-philippine-forces-successfully-conclude-37th-balikatan/.

[69] Kendra Helmbrecht “Makin Island ARG Conducts Balikatan with the Armed Forces of the Philippines,” April 28, 2023, U.S. Pacific Fleet, https://www.cpf.navy.mil/Newsroom/News/Article/3378412/makin-island-arg-conducts-balikatan-with-the-armed-forces-of-the-philippines/.

[70] Priam Nepomuceno, “PH, US Navy Ships Arrive in Palawan for 'Balikatan' Drills,” April 14, 2023, Philippine News Agency, https://www.pna.gov.ph/articles/1199380038; “Makin Island Participates in Balikatan 23 [Image 1 of 5],” April 14, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/7759799/makin-island-participates-balikatan-23.

[71] “3d MLR Paves the Way.”

[72] “Balikatan 23 | 1-27 IN BN and 3d LCT Conducts Air Assault on Bosco Island, Philippines,” April 23, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/video/881111/balikatan-23-1-27-bn-and-3d-lct-conducts-air-assault-bosco-island-philippines

[73] “Balikatan 23 | 3d LCT Marines, Philippine Marines Conduct Bilateral Call for Fire,” April 24, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/video/880932/balikatan-23-3d-lct-marines-philippine-marines-conduct-bilateral-call-fire

[74] “Balikatan 23 | 3d LLB Tests Capabilities of TRV-50 TRUAS [Image 2 of 15],” April 22, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/7763775/balikatan-23-3d-llb-tests-capabilities-trv-50-truas.

[75] “2-6 Cavalry Squadron Littoral Live Fire in Zambales, Philippines [Image 2 of 9005D,” April 26, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/7766284/2-6-cavalry-squadron-littoral-live-fire-zambales-philippines.

[76] "U.S.-Philippine Forces Sink Target Ship for First Time in Balikatan Exercise," April 27, 2023, U.S. Marine Corps, https://www.marines.mil/News/News-Display/Article/3376383/us-philippine-forces-sink-target-ship-for-first-time-in-balikatan-exercise/; and Seth Robson, "With Marcos Watching, US Army HIMARS Fires 6 Times but Misses Target in South China Sea," *Stars and Stripes*, April 26, 2023, https://www.stripes.com/branches/army/2023-04-26/army-himars-marcos-balikatan-exercise-9923537.html.
[77] "Makin Island ARG Conducts"; and "Balikatan 23 | U.S. Army Soldiers fire HIMARS [Image 6 of 7]," April 27, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/7772251/balikatan-23-us-army-soldiers-fire-himars.
[78] Aaron-Matthew Lariosa, "Kill Chain Tested at First-Ever Balikatan SINKEX," *Naval News*, April 27, 2023, https://www.navalnews.com/naval-news/2023/04/kill-chain-tested-at-first-ever-balikatan-sinkex/.
[79] "U.S.-Philippine Forces Sink Target Ship for First Time in Balikatan Exercise," April 27, 2023, U.S. Marine Corps, https://www.marines.mil/News/News-Display/Article/3376383/us-philippine-forces-sink-target-ship-for-first-time-in-balikatan-exercise/.
[80] Ibid.
[81] Brian Donlon, "Logistics 2030: Foraging is Not Going to Cut It," *Proceedings*, 149, no. 11 (November 2023): 21.
[82] Seth Robson, 'We Mean Business': US, Filipino Forces Practice Air Assaults on Small Islands South of Taiwan," *Stars and Stripes*, April 27, 2023, https://www.stripes.com/theaters/asia_pacific/2023-04-27/balikatan-philippines-air-assault-taiwan-china-9934054.html.
[83] "Philippines, U.S. Announce Locations of Four New EDCA Sites," April 3, 2023, Department of Defense, https://www.defense.gov/News/Releases/Release/Article/3349257/philippines-us-announce-locations-of-four-new-edca-sites/.
[84] Kathrin Hille, "US War Games Touch Nerve in Philippines as Tensions Flare with China," *Financial Times*, April 24, 2023, https://www.ft.com/content/08820f14-22d8-4e1a-8e91-139a47285624.
[85] Erin Scudder, "3d Marine Littoral Regiment Concludes KAMANDAG 7," November 27, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/news/458553/3d-marine-littoral-regiment-concludes-kamandag-7.
[86] "KAMANDAG 7: 3d LLB School Visit [Image 1 of 28]," November 13, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/8136462/kamandag-7-3d-llb-school-visit.
[87] "KAMANDAG 7: 3d LLB Hospital Visit [Image 2 of 19]," November 14, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/8136716/kamandag-7-3d-llb-hospital-visit; "KAMANDAG 7: 3d LLB Hospital Visit [Image 10 of 19]," November 14, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/8136771/kamandag-7-3d-llb-hospital-visit.
[88] "KAMANDAG 7| 3d LCT Water Purification Classes with PMC [Image 5 of 5]," November 13, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/8141190/kamandag-7-3d-lct-water-purification-classes-with-pmc; "KAMANDAG 7| 3d LCT Squad Ambush Tactics with PMC [Image 5 of 11]," November 13, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/8150971/kamandag-7-3d-lct-squad-ambush-tactics-with-pmc; and "KAMANDAG 7| 3d LCT Raid Patrol [Image 2 of 9]," November 9, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/image/8137086/kamandag-7-3d-lct-raid-patrol.
[89] "Solidarity and Skill: KAMANDAG 7 Cements U.S.-Philippines Defense," November 22, 2023, DVIDS, https://www.dvidshub.net/news/458397/solidarity-and-skill-kamandag-7-cements-us-philippines-defense.
[90] "Partnerships in Practice: California Marines Remain Pros in Southeast Asia," January 14, 2023, 11th MEU, https://www.11thmeu.marines.mil/News/News-Article-Display/Article/3526760/partnerships-in-practice-california-marines-remain-pros-in-southeast-asia/.
[91] "Marine Rotational Force - Southeast Asia," I MEF, https://www.imef.marines.mil/Units/Major-Subordinate-

Commands/Marine-Rotational-Force-Southeast-Asia/videoid/907512/.

[92] Charles T. Kimbrough, “MRF-SEA Sensing Team Advances Sensing EAB Concepts during Exercise Sama Sama 23,” November 20, 2023, U.S. Marine Corps, https://www.marines.mil/News/News-Display/Article/3593936/mrf-sea-sensing-team-advances-sensing-eab-concepts-during-exercise-sama-sama-23/.

[93] Department of Defense, *2022NDS*, 12.

[94] Kathleen Hicks (@DepSecDef), Twitter, March 1, 2023, 10:33 p.m., https://twitter.com/DepSecDef/status/1630954294861266952.

[95] Jim Holmes, William J. Bowers, Thomas D. Wood, “The Seventh Cornerstone of Naval Operations: The Home Team Has the Advantage,” Marine Corps Gazette, 105, no. 12 (December 2021): 8–15; Dustin Nicholson, “Make It a Home Game: lessons for Littoral Campaigns,” *Proceedings*, 149, no.2 (February 2023): 16–23.

[96] Wayne P. Hughes Jr., “Preface,” in *The Legacy of American Naval Power: Reinvigorating Maritime Strategic Thought* (Quantico, VA: History Division, US Marine Corps, 2019), xv.

[97] Ibid.

[98] Wayne P. Hughes Jr. and Robert P. Girrier, *Fleet Tactics and Naval Operations*, ed., Paul Westermeyer (Annapolis, MD: Naval Institute Press, 2018), 15–34. なお、ヒューズがいう「6 つの要諦」とは、①人が重要である、②ドクトリンは良き戦術を結びつけるものである、③戦術を知るには兵器を知らなければならない、④目的は陸上にある、⑤艦艇が砦を攻めるは愚か、⑥最初に効果的に攻撃すべき、である。

[99] Hughes, “Preface,” xv.

[100] Greg Myre, Steve Inskeep, “Jim Mattis: 'Nations with Allies Thrive, Nations without Allies Wither',” September 2, 2019, NPR, https://www.npr.org/2019/09/02/756681750/jim-mattis-nations-with-allies-thrive-nations-without-allies-wither.

PROFILE

菊地　茂雄

政策研究部長

専門分野：米国の軍事戦略、作戦ドクトリン、政軍関係、国家安全保障政策決定過程

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。
NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。
ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直　通：03-3260-3011
代　表：03-3268-3111（内線 29177）
防衛研究所 Web サイト：www.nids.mod.go.jp